

## 平成28年度食の安全安心セミナー（仙台）開催結果

1	日 時	平成29年1月31日（火）午後2時から4時まで
2	場 所	宮城県本町第3分庁舎301会議室
3	内 容	
	（1）講 演	「震災後の放射線健康リスクについて」 講師 福島県立医科大学 災害医療総合学習センター 副センター長 熊谷敦史 氏
	（2）質疑応答	熊谷敦史 氏（（1）の講師） 消費者庁消費安全課 政策企画専門職 大浦由樹子 氏
	（3）宮城県からの情報提供	「国産牛のBSE対策の見直しについて」 宮城県環境生活部食と暮らしの安全推進課

- 参加者  
56名（ほか 事務局7名）

- 意見交換の主な内容

【講演に関するもの】

（問1）

これまでのリスコミの傾向として、ある基準値以下なら安全だと説得させられていると感じる。講義にあったような放射能のリスクを喫煙、生活習慣などのリスクと比較することは適切なのかな。

今のような一方的な内容をおしつけるようなリスコミで問題ないと考えているのか。（消費者）

（答1：講師）

世の中リスクは1つだけではない。リスクのない世界はない。これまでも我々は色々なリスクと遭遇して、リスクを選択して歩んできた。

日本人はこれまでこのことを意識したことは少ない。冷静にリスクを比較してこなかった。リスクは、0.1なのか0.00001なのか数値だけを見てもわからない。こっちのリスクを取るのかあるいは取らないのかは、比較をしないと分からない。

福島では「避難」がひとつのキーワードであり、何のために避難したのか、失われたものは何かを分析していく必要がある。

リスコミのあり方について、説得的、おしつけは当然良くない。

今回のお話は、皆さんの考えが間違っている、考え方をええろというものではない。科学的な見方、考え方を紹介したものである。それをどう受け取るか、どう考えるかは参加者自身の判断である。

このような1対80のような場では、ある程度一方的にお話をせざるを得ないが、時間の取れるときには1対1で膝を突き合わせて何が問題なのか、不安なのかを一緒に考えている。

そもそものリスクの考え方は人それぞれで、こうでなければならないという哲学的なものではない。

これまで広島、長崎の10万人30万人といった疫学データがあり、科学的な証拠として学んできたことを福島の事故への理解にも役立てていきたい。

(問2)

様々なリスクという点で、大気汚染はどうか。

(答2：講師)

幹線道路からの距離で健康被害が多いことがわかっている。

このことから、身の回りのリスクには大気汚染もあるということになる。

(補足：宮城県（開催趣旨等について）)

みやぎ食の安全安心消費者モニターアンケートにおいて、放射線の健康影響への不安を感じている人が多いという結果が出ている。この結果を踏まえ、今回のセミナーは、医学的な見地から放射能の健康への影響について科学的に熊谷先生の講義という形で開催させていただいたものである。

(補足：消費者庁（リスコミの趣旨等について）)

福島原発事故以降、放射能への不安が高まった。放射性物質のことは小中学校では授業で教わらないため理解が難しくなっている。そのため、事故直後は基礎知識を聞きたいという声が大きかった。

商品の選択は自分自身で行うものだが、選択の際に自分の中のリスクのものさしが必要である。放射性物質をどのくらい気にするのかを考えてほしい。放射性物質の知識も商品選択のものさしのひとつにしてほしいという趣旨で今回のセミナーを開催している。

食品にゼロリスクはない。リスクには様々なハザード、原因がある。食品の健康への影響で大きなものに食中毒がある。添加物を使わないと食中毒が起こりやすくなる。どちらが危険かを比較し、健康影響が出ない範囲で添加物を使用する。

農薬も使わないと農産物が取れなくなって飢え死にする。江戸時代から戦前にも実際起こっていた。どちらが危険か比較したときに少量の農薬を使用している。

リスクを比較して今の食生活がある。皆さんにはむしろリスクを監視していただきたい。その中で自分は何を選ぶかを考えてもらいたい。

学ぶということは難しいし面倒でもあるが、生活を豊かにするために色々考えていただきたい。

【宮城県からの情報提供に関するもの】

(特に質問等はなし)